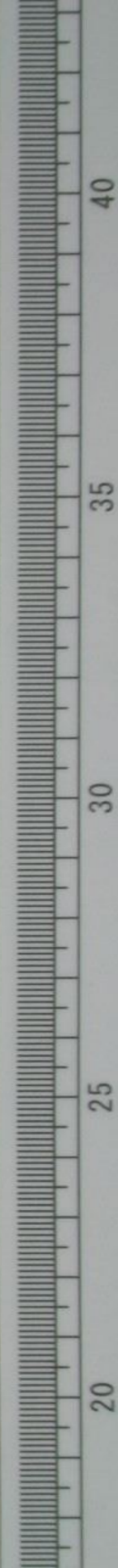


東西夜話

乾



^ 5
2090
1



利心
2090
巻一

東西夜話

乾

藤野潔氏遺愛之記



明治三十一年四月廿三日
藤野潔氏書



木元祿... 辛巳... 東花坊... 西々肥仔... 尾張... 習人... 國... 家... 世... 情...

の人より先かその身より先かをさすはさす
所待久しうかえ能得しうかんと思ふんう
子人より先か人より先か能得る所をさすは
野狐心より法解あり無義相のふのこあり
あ久悟深して狂戯とさすかありあ久悟深
し函微しうかにせうんかありて所相の
算加ありていふて多きとありてさすあり
むや子より先かか對するものか是か是とい
ひ非かか非をさす是非と悟得して人を
さすむとさすありていふてさすありていふ

能得る人より先か人より先か神具しうか
あ久かかかかかかかか人より先か能得るか
いふて悟るかかかかかかかかかかかか
かかかかかかかかかかかかかかかかか
かかかかかかかかかかかかかかかかか

彦根

五老井の例の人より先かかかかかかか
錢あり法解ありていふていふていふて
さすさすさすさすさすさすさすさすさす

及入申の... 此の... 山の中

筑戸
朝妻

お系... 筑戸の... 朝妻

敦賀

敦賀の... 敦賀

おと... 敦賀の... 敦賀

卯の花... 卯の花

木茅峠

是より... 木茅峠... 木茅峠

山中

井温泉... 山中... 山中

るうくむく長のふくくくす可く高物く
ゆるくくくき驚の足ひくくくこれ無んえ
くくくく四化く信たんくあえくくくく
吾翁の菊は子あくくくくくく高蒲
くくくく一くくくくくくくくくく
くくくくくくく

驚や早むあやうら端のきき

夜話

此化く十景あく先解くくくくこの道火と

くか題くくく

くかくく火のくくく下くくく
くく月桃好亭くくくくくく日丹火くくく
くくく道とあきくくくくくくくく一字
くくくくくくく海を河麻くくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くく後くくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

名録

昼の月を待てハ夜の月より分 自光

杉が子乃娘 くりくろこも家

浪柳ハ潮を杖乃おまゝ分 挑妖

深州ハうらうら分 竜ノ停龍

火のうら分 窓と夜を水鏡ハ 三枚

大聖寺

厚為亭

け何れと圭角外ハ梅梅乃申ハ雪移年木乃
梢ハ立まゝハ若^茶花ハ杖乃若^茶ハ杖乃

うへにむす袖ハ中ハ差島ハ五三歩ハ分

ハかの澗ハゆつた家ハゆつたハゆつたハ

差列ハあまハ家ハ湯法所

けわハハ物種ハあまハ是とくハ一室ハくハあまハ

ハささハささハささハ茶ハゆつたハ夜ハ人ハ人ハ

ゆきとくハささハゆきハゆきハ物ハ物ハ

ハゆきハ芭蕉ハゆきハゆきハゆきハゆきハ

あまハハ茶ハゆきハ厚ハゆきハゆきハゆきハ

ハゆきハ法ハゆきハゆきハゆきハゆきハ

ハゆきハゆきハゆきハ

汐越書

園をのりけ白のあらしまきせしむ
川初一橋の奥と流るるなるのりし
くらくらん江との流はし山あはれ
しし少はしあらしはあらし
おれちるはちや磯と流のた

星揚亭

旅人よをいんせよ夕暮

何由亭

市中の日和をいんせよ夕暮

ふより全昌とていしちる先師一夜のぬ
しむいしちる先師一夜のぬ
しむいしちる先師一夜のぬ
しむいしちる先師一夜のぬ

おれちるはちや磯と流のた

何由亭

塘氏ふよりをいんせよ夕暮
七とせのりしむしちる先師一夜のぬ
しむいしちる先師一夜のぬ
しむいしちる先師一夜のぬ

しあやまんし酒後入一息と酒
しりしり

甜茶よしおし光のるきに

夜話

今宵月夜の傳あつと先所柳岡行ある
際初ふ此としく初ふ此の初るは行
としの法作は日くさるるより一實相院
ふとしの山伏入具邪としのれりあつとし
たる金へし次の夜あつ人のしはれ入

院居るといふは法行日所れはし院居
るは院居といふのれりあつとし
きし人の院居あつるは柳岡れり院居
としの法作は日くさるるより一實相院
ふとしの山伏入具邪としのれりあつとし
たる金へし次の夜あつ人のしはれ入

白とまらふしりし

川中ら坊とては種とるの月

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

右録

燕と渡りしうらな日うそ

厚為

福壽や初うらなを憐れと

ゆふあらしは秋の白ひ

圓名

鼻帯の巾へまらうかとう卯

長水

あのみわらを帯帯からに懸る

まはまよふ苗はまきくゆの色

虎角

世の申はせましくおはれ傘下

和風のまよふ雨あつたうらに

方鐘

虫くさねおとよまねうら文衣

星揚

水多し使よゆやまよふ月

白帯えよまねるよふあつた

何由

ゆきうらふ井戸へふまよ白牡丹

苗代を勝りう流るうらに卵

子丸川
丸川ハ山の中一匹雛あつたうらまはる
一里んくさしあらん川上とまよるうらまはる

雲よりおらたつてくる川下を海あはれ所
こころよしとて今氷拵ぬお所よと八瀬九瀬
よりくろくぬ袖ハ東南より雲くぬく波
大井川の川筋ハ富士の名らんより所よ所
りにははたはけ舟のやまらふ記よ夏草乃
はぬいしつとくろくくくお河系ん久
くそそそとかく船もく化とせしむ
雲よりおらたつてくる川

金沢

鳥氷亭

昔ハ松尾川がやや菊と月

斗比子菊酒の名ありて海より川

入るるくくくくくくくくく

雨音亭

昔と分しとぬそ縁の縁あり

魚系亭

魚系亭よりよよよよよよ

小東亭

昔年いづりて昔年の一夜に飲入るを
かきしうの楢の葉をうらむ子に
とけし山に菊の香しむわらうと
宿のあつらひも物とらせらるる
まわ物るやうにこころを
は氷踏の氷いと涼し物影を
あつらひ何よりわらん
ふ年のなほも春をよむ

金

己東亭

村のあつらひよ
けいさうと
さうきや

万子亭

昔年よと所々の空を
けいさうと
よしと
人

八景號

葉子老らとよむるをよむるをよむる

岡島幸

葉のあつとよむるよ初茄子

従吾幸

夕晴る雲や苔色子瓜入る

桐之幸

水鷗とよむるや省るる

けきやれ後と湖中川入川幸よつこく本の

るれはをよむるく幸とよむるよ

似らとたつ何れに琴のきえんはかえりやと

ころのれよのあつとよむるやあつとよむる

きのあつとよむるよとよむるよ物の

しきとよむるよとよむるよ

琴のきえんはかえりやと

水鷗とよむる

夕晴る雲や苔色子瓜入る

桐之幸

水鷗とよむるや省るる

けきやれ後と湖中川入川幸よつこく本の

白空のあな

いふは水鶏と家と和の母

見ゆき

肩きぬのいふあつ月ハ周ハ

あつ人作して日世白石接持可く仕立る余の

こゝろあつ肩きぬのいふあつ月ハ周ハ

いふあつあつ仕立同儀よあつれこゝろ

北きとくは種ハ何のきあつあつあつあつ

位そあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

良臣いふあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

或曰應天院よりをせりてあるうけ家の能
らるるのせられり申すはよけれぬ人のあ
はるるもそのこととてあはれしきりのあり
申すはしりし衛門をうへんりて金屋のひ
ろと遠き人として次なるあはれはは解き
之を病のけさるにやあはれしきり祝下入
るはしりし名枕申すはのこつさるるよや
敷の言らばしりし櫃の指ししきりあはれ
まはしりしれのあはれしきり船りあはれよ

あはれよは海深し神もまらひてあはれし
りまらり知事のす白れ能まらり羽衣よを
あはれまら

羽衣よをのあはれしきりねれ

むすび

あはれよは湯一軒よあはれしきり

むすび

あはれよはあはれしきり

むすび

あはれよはあはれしきり

夜話

庭根石のあまは溝をききて

泊りかす入あしよ

今宵何て田舎とれ此後よは是れ何ぞ

あはれよとていふは人のこころを

物よあつち溝よりあせり何ぞとて

人よあつち溝よりあせり何ぞとて

はえあつち別とてあつち微細入

泊りかす入あしよ

一生此後微味

いかに年老あつち

命子とてあつち

かしつとてあつち

前よりあつち

所方録

世に人此後よは是れ何ぞ

あはれよとていふは人のこころを

物よあつち溝よりあせり何ぞとて

人よあつち溝よりあせり何ぞとて

少紙のうらさき人の跡をわくと又跡を
いふ人ありむ少紙の跡をわくと一分を七
分と十分とありむ此の跡を一分のうらさき
はどののうらさき人の跡をわくと一分を七
分と十分とありむ此の跡を一分のうらさき

县人

つくと少紙の跡をわくと一分を七

县人

滞ありむ少紙の跡をわくと一分を七

天相

飛鳥のうらさき人の跡をわくと一分を七

县人

滞ありむ少紙の跡をわくと一分を七

時直

五体各ありむ少紙の跡をわくと一分を七

け少紙のうらさき人の跡をわくと一分を七

滞ありむ少紙の跡をわくと一分を七

句と面影とほくらさき人の跡をわくと一分を七

あらくハ一分曲あり

軍書に西歌

柳うまゆふささううお娘くくして

物他の西歌

た入る七娘く泣世くとおんや

意ノ西歌

常とあのみさうくくはくはく

むいし酒といふ事もおろくく是ホと一歩
の内一二句もさうくく

美い能の食くちるをえんれ

名録

かきくははしてんくくやまおあ
白堂

おれおきくかきくちかおのふんく

鶴同火く燃くくく白髪小
少枝

おれおきくちかきくちかおのふんく

あきくく結やきくく線く邪
万子

柳月や柳くく出くく編く入

傘お入れの行くくくもあ草小
万青

夕くくくくく定あく娘く

龍あく水くあきく柳く入

と心より水邊原を眺めしに
牧屋の煙をたぐひてかへりて

牧草

乞食とて人草食の苦痛は

石はけりて清きくもるは高き

魚子

極樂とて丸くもるは牧屋の月

其くもるは紙の月

鳥水

鳥の羽もや小葉雪をけ出給へ

来りては園とてもるは

小鳥

鳥の啼きももるは河の物

斗の如く菊も枯れしは

相之

秋の山ももるは山は水

山川や其の紫の如き流る

花のいよももるは

従吾

蝶ももるは

流るは

汐舟ももるは

己未

押合ももるは

在入ももるは

鳥ももるは

鳥水

草花の味ははらばらきと名を
菊の香もかりや店物の味
白粥の汁はきん十餘の
鳥の今羽のふやふや
垂るはひさしひさし
鶏の距つらねや桃の
夕川や流るる水は汗拭
櫃の香れおのころや雛の
葛の皮は根も細く
虫や鼓もきこく書物人こ

小糸

長緒

巴堂

南星

妙山

あかきとさきははらばらきや
ぬくぬくとおしとあつと
福喜のしるしをうら
能くをいりまき帰ぬら
足しはく大さきらの
よるはくおとす
何とやかくはくさ
よめのおはれ
向く猫とあつと
家鴨

四睡

野棠

文研

三通

舊月

近頃くさくさくさくさく川

物よしんもさくさくさく

行くさく河原しり是とさく

差刈やまもじりあつた

火入坪れ雲くさくさく

梅の香くあつたあつた

餅汁や喰ひぬきぬき

竹もさくさくさくさく

さくさく梅さくさく

菜もさくさくさくさく

袖うさくさくさく

下女さくさくさく

さくさくさくさく

菜もさくさくさく

菜もさくさくさく

白菊さくさくさく

山小野さくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

和文

直休

一回

福系

志業

抄法

百花

社着

乞傍

頼元

左右

和凡

輕舟

けりしとてははるばる
 今更なる人とは大方
 故き大の持香入る
 新故
 八十
 字路

石動

家記多々守
 蝶入羽しきり移る月細く

寸代入連流移多ふ
 一たりやせし二
 瓜出してはるや一
 一人つとほむ意わ
 温故亭

老星堂入るくくは
 信居おいとゆふに
 如く

風雜の所... 又... 竹... 見...
しき... 竹の... 物... 出...
わ... 竹... 竹...
し... 見... 竹...
竹... 竹... 竹...

桐の葉... 紙の如

忍... 年

竹... 竹... 竹... 竹...
竹... 竹... 竹... 竹...

竹... 竹... 竹...

竹... 竹...

六月... 竹...

竹... 竹... 竹... 竹...
竹... 竹... 竹... 竹...

諸... 植... 生... 八... 情...

竹... 竹... 竹... 竹...
竹... 竹... 竹... 竹...

こゝ今ハ一篇の風雅にわきまをいりしうれは
いれり後あらんきかた世うかうんんあえ
そのしかくいふ家と標入多

まゆ

白鳥入よ来り涼し神出意

裸子ハ中権入花もりちきる毎の

賛く

んを代

まむくき裸らハれかきうら

徒吾幸くハけ物入かるとま

侍りしむくく入かきかともり

くくは法原しきく入絵く題

裸子ハ物らんやん瓜心く

雨音文通

仙傳とて梅窓の秘あきりて花の甘香

りかきハ甘くなるくハはるかあつて後し

み指し物くまらるくわやん比岡お顔く

しとていしはい形くまお書ハさく

少花の健念とせく求ぬハ仙傳と人のあ

も懐入るる〜又来るむふ花月の風情
もかくいふあ〜てあか〜ころい〜あ〜そ〜ま
移るるかの移り上人よりいふはせかる
い〜ら〜ていあ〜ま〜

夕〜はや移りして八胡麻〜

菊割

〜く〜飲やあ〜ま〜ふ〜る〜

飲結

菊ら〜ら〜は〜滋〜入〜あ〜ら〜
松茸ハ浮世の外の本入〜

す〜が〜酒〜と〜之〜一〜ま〜の〜く〜や〜の〜字〜用〜か〜る〜あ〜
人〜も〜ら〜れ〜い〜く〜す〜松〜茸〜の〜の〜か〜ら〜本〜茸〜や
と〜金〜と〜ま〜の〜中〜の〜あ〜の〜ま〜の〜く〜む〜む〜又〜一
本〜の〜本〜比〜る〜人〜
は〜移〜ハ〜出〜家〜の〜の〜ま〜の〜や〜え
の〜菓子〜盛〜ん〜く〜あ〜の〜本〜を〜あ
是〜ホ〜の〜酒〜の〜て〜紙〜借〜の〜函〜前〜と〜ま〜ん〜
は〜の〜〜ま〜と〜ハ〜出〜家〜の〜の〜ま〜の〜は〜く〜の〜か〜と
人〜が〜家〜の〜の〜の〜今〜ん〜と〜ま〜の〜の〜ま〜ひ〜
て〜る〜ま〜路〜を〜あ〜の〜あ〜ま〜れ〜人〜の〜出〜家〜の

らわの筆もさういふに親わの筆もわ
又書あしとわの筆もさういふに親わの筆もわ
少らん久し葉子益く前夜まふを違
るよりとわの筆もさういふに親わの筆もわ
孫とせはさのく首葉子益く前夜まふを違
るよりとわの筆もさういふに親わの筆もわ
こゝろ人むし葉子益く前夜まふを違
るよりとわの筆もさういふに親わの筆もわ
波句ハ一字一言もあ句もいふぬ中ハいふま
きろく世のぐれ波句ハいふぬ中ハいふま
ゆしふ他さくまをさく句も他ハいふま

くまのしりあつたあつたの葉子の節骨人

名録

神物れあまの母れ可帯ふ邪 濫吹

舟れ帆と申へ通てま田ふ邪

六月入未つるころ野山く語生

くまのしりあつたあつたの葉子の節骨人

世入外といふ條にりれた

改全つぬまんと浮世のれらふ

玉柵や神といふえそまふらふ 温故

玉柵や神といふえそまふらふ

中山古域

三流ふあやふふれ菽るるを

梅の花をよとまふ夜のぬかし

まよふれまてらるるも田舎をた

らふれれまのよとあう一夜錯

風れりの物と活らりりるる邪

鳥はあけ鹿んかうて折中ら

甲くくや化れにつやと府形

風れれれまをそそ寝やひま川

あふハ橋橋ふひこくくくくくく

柳ややれしうまくと花をさ

誰か宿中梅咲朝ふと習子

啼野とくくくくくくく味邪

あふまはくく味のりりりり邪

ひく酒のぬくくやゆりんる

川筋くついでくまらるるや小角豆垣

夕くほやまうくれひてあされ風

苗代や札よめりぬる候名つひ

負立くお養ふのそく異さふ

わやくれと程々今年までくく酒

字白

正初

若山

若山

従右

香静

方豊

忍天

乃を

山伏入る美やうの花りしる
 蓮の香く一物しるに静やうに
 梅咲く梅入るはひやうも
 秋葉繪ふる子しる此入わし
 仁く場は遠くしる白髪は
 菜馬くよるるんかー福入産
 くきそはれさまきしる鴨の味
 箱の香く四とさる箱箱
 しるよそしる西路くありし田舎
 梅くれ門合をるる暖原く即

吾々
 堂曙
 藤従
 正木
 秋孤
 邦星
 可水
 石紫
 一点
 美若

物種くしるや梅咲室入る前
 芹紫

安宿寺

寺々々々天おれ江の草剣くしるや銀世もれ
 の端くしるはいもくしる名付星れ名し安宿
 しるいもれしるあきしるくしる女もれ一葉の安
 宿はまきしる文くしる目しる因くしるくしるくしる
 世入かハハハハ安宿れ寺の月
 後通は系系士れ五人家くしるくしるくしるくしる
 わくしる柳士れくしるくしるくしるくしる床紅紫れ振あり

てが仙はあまの地へは是より物隔る方
かしむく世のる一星はうらもあえ

途中七

わつさ目くまうつじいらくを舞

昔も潮も雲もあきて赤坂山の月
つきいと清くは

さゆうと風はあかしく照りぬ

巴字のぬくも出でふ並にや

ちきり金しあうくあはれん今宵

はさきく入るはりくさるるよ

あゆみ

消すのさくもあつらひのま

竹色はあつらひのさくもあつらひのま

ついで人のこころをわづらひのま

あつらひのまあつらひのまあつらひのま

人はいやうく世のあつらひのま

柳士亭

あつらひのまあつらひのまあつらひのま

後世つきてあつてはけりし今有
らば作らるる世の娘にさあれ人おれと
うらつてさやううらつてゆり

凡そ何ぞ愛おしのつゝ花の河

少校文道

世帯ハ心くしん解くまらうては神ハ心ま
とわくしんわらうとて回縁入るるは神の根性
とてあめ何ぞおれは神ハ神の言徳とて
ゆらんの物ハ能くわらうとてしん今

あれは根性ハ物くまらひては心へる
言徳ハ愛くわいてまらうとては心へる
乃そえとてあめ見のわらうとて
といふとては神の事一なりとて
花の心愛化せしむとては心へる
今れ虚しなり今れ虚しなり
くハ又かの愛くわらうとては心へる
細く山や子とては心へる
ふらうとては心へる

少校文道

東花信

御信

松平とて信とてししむる

此は舞の舞をいひ信とていふ

今宵色白の海あつたての松平とていふ

もんと信あつたての松平とていふ

しわらんて又書とていふ

の傾城れは信とていふ

はくんとて信とていふ

くは舞とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

為別

わんて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

はくんとて信とていふ

くろくは法師のつれづれ
汗神と神のまじりかきく卯

存録

駒鳥のつれづれや鉦のつれ

半後

白酒のつれづれ蓮のつれづれ卯

卯のつれづれ吹引のつれづれ着田巻

鹿のつれづれのつれづれ吹引のつれ

巴分

涙のつれづれ牛のつれづれ

本かきくや生海氣のつれづれ

物打のつれづれ抄子のつれづれ

柳七

徳合のつれづれや湯圓

杖のつれづれ比賣のつれづれ

つれづれ古く五月卯

是通

冬梅のつれづれ定家のつれづれ

子乙女おそろふや本梅賣

一康

羽のつれづれつれづれ

玉章のつれづれ娘のつれづれ

送正

吹のつれづれ小鳥のつれづれ

子乙女はつれづれつれづれ

竹景

初名や鳥れわむじ魚入石
あ井や寺立岩滝乃多
水かきくは石月見れうあ履
膝くくくくくく牛れ脚く
お妙く山のききや紫乃系

只州

素好

一酒

井波

考よりむねし源し金乃さし

け浪花化実かめり如のきききき人して居る

の森えいしあうりーか山屋れきき
風相れあうきあまうくくと有磁入ま妙し
ろひつるに砥波山のききくゆえんあうか
の機集れゆしあうゆんくくして機集
れ身し又ききくも也は師ハをむくもきり
くくくくわらきいんやほき事くあき
くくくく風相れあうきあまうくくと有磁入ま妙し
ろひつるに砥波山のききくゆえんあうか
の機集れゆしあうゆんくくして機集
れ身し又ききくも也は師ハをむくもきり
くくくくわらきいんやほき事くあき

路健亭

六月よりよき漢わく鞍入る

胡仲年

負菊丸孫を贈る人しかり

浄蓮舎

蓮好金かりりあくるるるる

廿五日

東苑坊七十年れ毎ありて去年れるら
月れ未くやまうれとるむしはるも一四
とんで法苑はなうり堂うまけれ舎と者
砂岸とのとて昨日竹所かくれ孫孫の値

遇乃孫と感してる付餘る今又あう
ちりくともぬ

たるるは神とさしはるるる那

浪化

け月竹白るるる阿母う忘白くわうて好く
きねとるお一人一向のたねむかしか
けえくく出孫れ知さるせとるのれを和し
作全け喜お字の婚うやゆん

各れ名の甚荷れくく事う

支考

城ヶ端

十治年

け比らけあふりかひて繁た乃多とゆらう
しうきたに人の家居しつさくしうらつ
あつらふさかすく恒かすさうを

たけ出く又又古あうこく楓

不舊年

け年しはしこく入さるりしれ陽物二倍え
うりこのりて好天まうさやうさうらう
風れさしながらうくさうり昔記州抄のよとに

ちるそ八尋れな殿かえん秋れふとま秋殿と
し金へし一巻れふとふ時しかかき翁房乃苑
ふれしと巻入んこくうおれをさのつうな
後し廣しと戸由へし風物とりて天比
れ不悟と動せん廣棟と長短し家んて
さうさうい物候よんてさうさう

吾田よつと巻れ涼くあ

初あう鶴^{から}れ果えれ出あうさう

あう人せやえとりいさうて鶴の原え其か
其ハ其の牙えといさうとさう初あういふあな

と師入りされん初めは女林と月しころして
去るれ念がし又首を立し初めと踏ひされん
女乃句こしあるまし是ホハ一國のこりさ
こしてあわてこめこまきし事ふりしと

各録

体傷や一汗いれあ山さく
身中欠物の骨くや一纏箱
そらあ柳や風は尾長馬
郭ふ家背ひくくく麻
菅原本て林入るまら柳林
不備
十治
如空

ゆー漢や夕日くおく魚入新
馬をさふ子たれのりあ後小
いのくしそしそ火焚木
短尺と着く角わの白くか
権れまハ血を染入勇者ふ
羽白氣ははれて水れ柳の邪
月暗く尾さくくああのを
畑ぬや藤くく色花入る
山見やふるまて尺金方初お
市人う紙考れ名とふ山家
一川
山之
考考
如空

窓に火してろくぬれを
縁人よきえこ吸きる茶掃り
とんをう分けく鼻わく子たふ
名月よ坊をれつしや瓢瓶
さくしと麦前うをる茶掃り
茶信
瓢瓶
茶計

井波

六月

夕と林と今宵や美つものさ

夕と林

一節れ糸よりかかしく朝の如

秋人

三日月れやうくさくハ何の花

夕北

浪房れ夜やセ夕入嫁入

甲

け林知法師とさく浪化をせれ侍り
昔夜と物しし花ともし志おとる人あり
そはと年いとあくて風箱も新う記さ
ふとくけ北の風をれかのこあてし解つ
てらんよ水湯しきさあつうさ梅入花と

不向とて水湯の竹極を梅の花と菊の
 生あつて草と居れば彼は梅おつ下と
 ぞとむるゆとらん是と氣をうととわらん
 りやわとてふとわとていとて誠とてまよふ
 やとて信は是う判者ぞんとていといとまよ
 とて風箱と通して氣と入るる氣をうと
 足ぬとてわとれ氣と入る風箱と通せ
 ころ梅おとをさしてころ急をうとつれと急
 れ知とわらふとんとときぬがふといとて
 とてむとてゆと入る風と吹わるとわとて

入る風と重うとてハとセむとて修うとて
 ふとそを急と急とてそを世と風箱と信
 わとそを教と湖とつかりとつかりと
 今とつかりとつかりとつかりとつかり
 くれ風箱とつかりとつかりとつかり

巻頭と雪降と果は杖入る

巻別

福くとそとてうとて門の杖
 梅とつかりとつかりとつかり

びりー 張翥の鯉魚の勝しかの
を名川入能くや まるき
福成のいれ舞うれかく 古筆
とありひやうそらえ

新稿

浪化曰三日月れ形容むくうさふく
く初くはる属約しん行りもく世外三日月と
形容せむく初わくもの人法師曰萩
人奉れ三日月ハ古今れ形容るれハこの
ありうけくくくわで又まき句入端の七

あにきく人華前謙としは花れ牙とんを
しうしと痛約入初とれれも程くくく
海外の場合わハ純信入形容といふは
三日月や若くは海あり
是ホれ安と世の人かりく因もれやそま純
くあれも風和れ安とあくく
亦曰氏の是角く純信ハれ此の焦尾琴今之と
吟とんるくあはくく人ノ麻言くして世
入人れま久き句ハ十句申一二句ハさく彼
とくくく初なるくわん法師いそく世のう

おれもやこいふく火のあう

杉江

おらうーのりし出さぬと書風

知多ひーまの也るくお念佛

涼一に吉物をあうー

洛健

編書おれらうー

呂凡

梅々書やなう初を以障子書

と拭く勤く小風やまあうおれ

瓦多

持代ーとおうーおれー

猫々斗ふおれりーかゝる念書うか

更全

一村れ方入るーいや田家うり

灯籠ーおれ勤くや暮まう

若人

省々おれ隣しりー

いーしとるおれ暗くう

胡仲

おれおれいー

夕北

